



うづり
 ちか
 越前
 弱法師
 鳥居

~13
 3940
 2



冊 五
號 富箱又
函 氏

門 へ 13
號 3940
卷 2

近江縣物語卷之二

○ くらさゆくら

近江國なる橋の安世が歌よる梅丸がゆり
あつて被しむむそ月夜をさしけるある月一村俄り
しりきましく伊勢の國より盗人も多勢にて知れせし
資財道具と持てらび子とてた老なるを負く東西より
ある安世の歌よる金銀の歌の宿を握り深く埋め藏し
何れかとり用意して置つれど俄りおまびりえひこと
おしよきまてとまの歌よるをあげてさしきりしおま
あましとらねんせとて刀よるハ掛つれど裏ハ表ハ歌
わらび盗人はおひてらすでおらんもあつくは恥ぢやわ

本源
栗

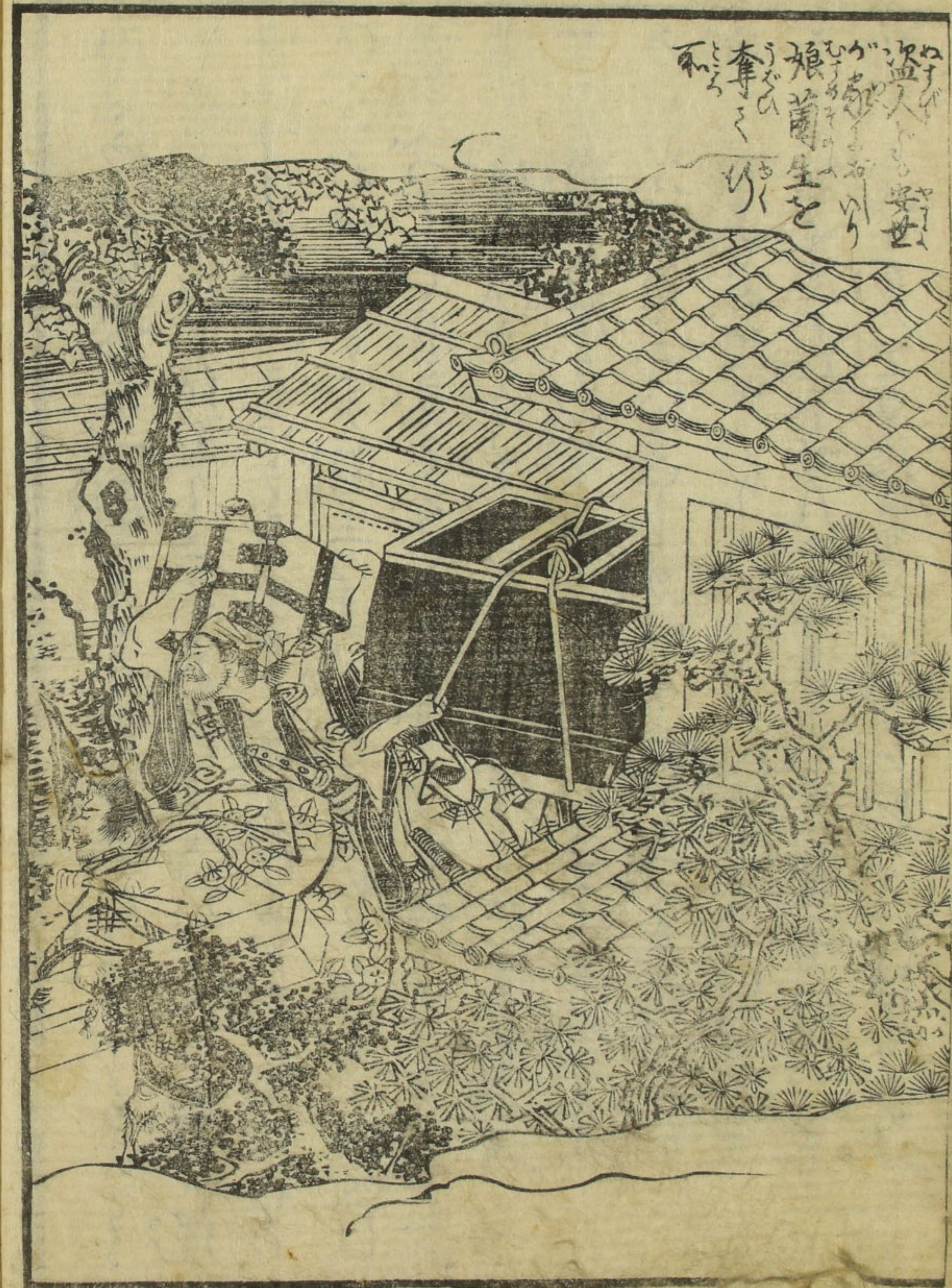
川馬書

ひとまづのがしきらんよありてあひて妻がまどとりて裏
乃方より出てを落ゆきたる菌生ハ此時例乃菌よありたるが
かいらん心し思ひけるはとひ外に出るも女の足あて
えつてあつたむ事何とぞ必ぬまびよとよとらさ
あまきあわやのいまいりてこの計あらん成りましく
命ぞもち貞をも全くわけて再夫にめぐりあはま
思ひめぐりて父がまそある薬箱の中より巴豆とい
葉とりのおと面より足まてびきまらぬか塗てその
まゝおろが部屋よりたぐびても臥のりたるはほどよむ
ひとたじくおしまりてあせが家に入りて見る
男女一人もえび猶かろおきたる財を何と見とて

ひとまづの奥なる端ごりたる菌生が臥所よりあまき
をえつたをいれぬこもわけて引おきて腰の縄
ゆひつけて引ぬきぬきすりまうし毒さけおと耳なりは
ひきつれゆんとす菌生は病者なりかくおせそとくは
盗人つくと見えくや病者より歩行せしゆくべ
とて肩へひきつけおちたるとらひりる菌生は白
りた時より深き窓のやちをえりてまきぬたわ
らびいつまかばらむしおろむむくつらむし
像とありておてゆれ心のおちいそりらつひ
あしりえんせんせんまかたごて観音ぼろを念
祈りけし身をとれたかしておちたけしきるから臥の



江戸物語巻二



盗人
娘
生
り
不
奪
り

江戸物語巻二

たりしりかひきありひさるほはつれくまりしれは
 ちあよそおびくも田樂のつちなむおこひて見
 たる興入おしりて目々催しつて此事成り
 かり。左衛門やちちもあきる比日なれてはわさ
 門さく青あけきば明ていれ見ん事あり。家司
 なる。兵夜責めを預けたる。あかまげつとく
 召入るに。何事にくだりつとて。兵藤声さあげて
 希有の珍事いできく。孫下り。さく。人。奥方ハ
 盗人者あり。殺されし志を。あてひ。あてひ。あてひ。
 ちて。わく。と。左衛門。い。事の子細。い。と。せ。り。あり。
 兵藤目や。ぬらして云る。君の下。せ。い。て。後。我。も。

昼夜とららひ。この内と守り。出。去。七。日。は。親。を。い。
 清水の御寺に。い。あ。と。夜。や。る。あ。ひ。び。と。
 二十騎を。い。り。物。も。奪。い。糧。藉。は。い。び。を。若。
 黨。も。せ。れ。戦。ひ。い。も。い。り。男。女。を。あ。り。く。
 ち。逃。して。い。し。某。お。け。帰。り。つ。き。い。る。た。ち。や。決。
 ち。火。を。つ。け。焼。失。ひ。お。す。び。と。な。い。け。も。あ。い。び。
 ち。い。の。後。は。藪。の中。に。い。ら。す。む。く。あ。の。い。て。
 ち。い。れ。い。あ。か。ち。い。ま。ま。い。い。る。あ。い。
 着。し。い。の。い。ち。夜。ま。て。お。し。い。い。り。す。い。
 ち。財。乃。有。所。い。奉。け。る。い。い。ち。り。も。り。殺。
 奉。け。り。と。お。し。い。い。ち。い。ち。い。大事。い。で。き。い。

左衛門梅丸をとりてあつて郎等よりいひまはさる
計に左衛門目をたててあつて命を盗人のすりかへ
はるばるといひまはさる今ゆきもひさし都にいた
と之を兵藤都も目く治人をも入めて糧積りし
りしあつて先は大事と告ぐるんそいづき罷下りし
都の事いづもほりやまはる左衛門のれはとあつて
より三十年に成りぬざんじむりの大事とてい見ん
道理なり今より都も帰りのほり先朝はちりて
合也帝都と守護し奉らんそいづき用意せしりし
兵藤あつて伊勢近江は屯せり盗人も何萬騎
といふ數もあれざればわけやづりて通らんそいづき

いづし思慮とていづしあつて郎等より
かく旅乃空におつて物の具とて用意せしが
向ふ人事計なきに思ふそいづき爰は止まりあつて
都のやうそいづし間せりし諫れはしるそいづき
とを留りぬが物忘れし時なりけしバ街道も人の往來
たてて都乃おとすそいづき左衛門云けるハ
いづきさへき人をはりて都のさぬと問ふそいづき
なりたれとてのぼせつそいづき郎等よりいづし
同い見あをせしものそいづし行んといふ者も
梅丸すし出く某申きて都のさぬともいひて歸り
はのらぬといふ左衛門乱軍の中存亡おぼろ



近江県史記卷二

無用なるものと見えれば梅丸あがらばいひりる
のげんふの必定つづきくありはくべくいねんや
しりた漸門さしをそそぐねつてなる代家より
何ん安世とものやんも恩ある師なりしはけづ
かかかをゆやげついでよあり尋てあまは
せば知ごこの人日はよふもくしに必るあひ
来よしり梅丸をれより旅をひきておの明を
旅かここと出く都さしてそのぼりるはねた
旅のさきさしひあるさかく盗人もの山野ありて
ある時すれはさきとする人もさしひくおすき
車しんをゆきありたくとする乾飯をいよそき

食とぬしおはける社をさよやどりのつら
美濃國某の郡にさるる日すては暮かりは
二にやどさしと見えさすは本林のうげは犬なる寺
はれをさししていそは門は入く見さ僧をさ
す。髭あひ眼をさしき男どものいりき太刀
たかろがいらくさくあかこはむとあり梅丸を
見るよりはくしとさき太刀をさすけておのれ
何者ぞしし聲身つきねのひくはとあり
ぬけびとの住とらとんづきしと手とつきあの
尾張の國すの田樂あは都とさある者のひ
やまひはひいてはくしとさすの住んずる前日の

少くを宿りしむげやと存りて思ひむいよ侍りてい
 何れれゆきや蒙りてなることぬす人うち
 守りぬくたちあき者なき向ひてやの田樂を
 けざとするやここのの宴席はここのはたわら
 り入る者なき人よ若くしてとつばねの
 中へここのこして縁のくものほろ梅丸うち見ま
 くに鞘をさるる鉾長刀かたあきし壁にけり
 盗り取る物とるここの皮の籠袋やの物も何れ
 かづこめりひひけぞと折敷にこそ取りあ
 来くくもさるる首て奥の方へ誘をいへて見
 れば横壁に賊魁とおほくしてけつまぶげあ

首
 ちねは福なりてさるそのやうたけ高くさるけ
 ぞもたおよかびと酒のさる梅丸一禮して壁に
 横壁あおぬびとさる若者之田樂はあ
 どのそやとさるかさるぬびとさるさる
 いひけぬすさるる笛鼓やさるさるさる
 さる梅丸いさむさるはね扇とさるさるさる
 かさるさるさるさる
 枝さるさるさるさるさるさるさるさる
 風吹あさるさるさるさるさるさるさる
 とさるさるさるさるさるさるさるさる
 何げてあをれいさるさるさるさるさるさる

とほめしむるもあらざりて興きんずりり此舞このまひのありたれや
 めでけんつゝあひまほのぬいびとのふらほひつゝあがりて
 ぬもびつゝぬす三輪さんりんの神かみとおぢりてさざ巻まきのつ
 のひしとぢりよふらとどのもそたの一見
 とつひてさざり舞まひる物ものを燈臺とうだいよひまうけて横
 さぬだれやしてりぬいびとさざりつゝひてあてく
 けき舞まひりかどぢりぬもつざりつゝひつゝあて
 りてかきつゝつ横よこ屋や乃ぬま入いりぬ梅丸うめだまとほりてりひ
 をハ汝なつか京みやこのぼんずるハ我わがもめりぬよありて道みちを
 ふさげてわれがやまくとほりゆんてかかぬひのむきで
 物ものもあきさつゝをひとて焼やきしやうぢりぬひさきれを

ながけおつちあは我わがもがらの割符わりふをまじ持もちてとるん
 一ひといづつも行ゆても汝なつかまふまのハあは成なりりぬ梅丸うめだま手て
 ぞりあげてから時ときはあはれまじらぬぬ物ものもさふらぬ
 とそつゝさきてかきあはれぬとさえぬと酒さけ宴えんも事ことをそく
 ぬすびとぢりおのく臥ふし入いりぬ梅丸うめだまもぐりやの方かたはあ
 寐ねりりしぬいもぬれぬを起ありて庭にわ乃方かたはあはれぬ
 かよ女むすめ乃泣な聲こゑのゆゆれを何なにやして何なにあんとさかひ高
 一ひとぢりつゝあはまの月つきをあらうて出て物もののあらぬ
 登のぼり見みゆさバかの舞まひすもかたさだぢりつゝゆくに堂どう
 うあらよあがりて樹きどもあひまげりるもあがりてかきハ暮くれ
 所ところあり物ものすこき事こといなんぢり入いりて見みゆさ女むすめのうら

梅丸盗人の
こりりたる
河を思ひ
半世が身
は輝か
とたれ
あさせ
介ら不



大づね元出く手にけし竹垣を破り女が手とり
多引いづ道と敷ておしやりつけれも爰はありて
こののさぬじりかんとそやぐてすが笠うちぶりすそ
引上げて都の方とせいとまき行る

○山のとね

あに夜又九しりぬすびしり袴が羽羽異したの
たる者そけりりる近江國よりて大寺の法師を追出
まづかろそ六のわろし成てあすこの盗人をあさぐ錦繡乃
志とぬ座山海乃珠味とあつめほまきゆにせりてを
住わたりりるけしひ信よせの女をを庭すそあへて夜又
丸縁は出くあつらわゆる中に先づゆりる姫あまをにつけて

何者そととを姫泪をかづてまづ山域のくにのわね
かりに住る者あていかり歳とけての命も何うせん
くいうにもいひせまひねしり夜又九あおのれなく持る
まづしちまじりるべしづくまかき置るごとく世といひ
けりしひてさる山里に住る者乃かぞふたうをさくくま
しり夜又九姫がまをを見るにあつらわゆる布乃衣まきあ
をれば此姫人づらわては見ゆとど衣をまればいやきことの
こ見せりくやつも申らば者ありてまづねりてくひも
大の置イ多衰九陣におりやまづとて別そしちやく
出いぬ扱はゆまらるる女ハちれしりて女をこの外
やまひは好ぶつら女一人まらまらつけ夜又九印ひきて

口おほきく鼻の穴はさうなに向ひく鬚がら見ざり
とこと男がふらうきいろぶのまてありはれはけき女ありし
きやうり大まららびてさるめのいろを見せけりごくひき
 いせとのひつけやるやそおて来り女をそれ白きあや乃
ま衣うさぬてうをぎにひゆし桃色のいろのけりはやうな
き着て人からあてある袖は液はぬれひりてなうくと
いいでまらりしやん安世かむその園生あてわらる顔も足
たかどの腫てえゆる盗人は手しせど計どあてずべく
身身のうちよ巴豆をおりけりはれはけき病者のさ
ととい減まるやうり夜又丸うちるなりけりあはぬか
かかぬとそらよ涎ながりたるして油のさうてがいらをわけ

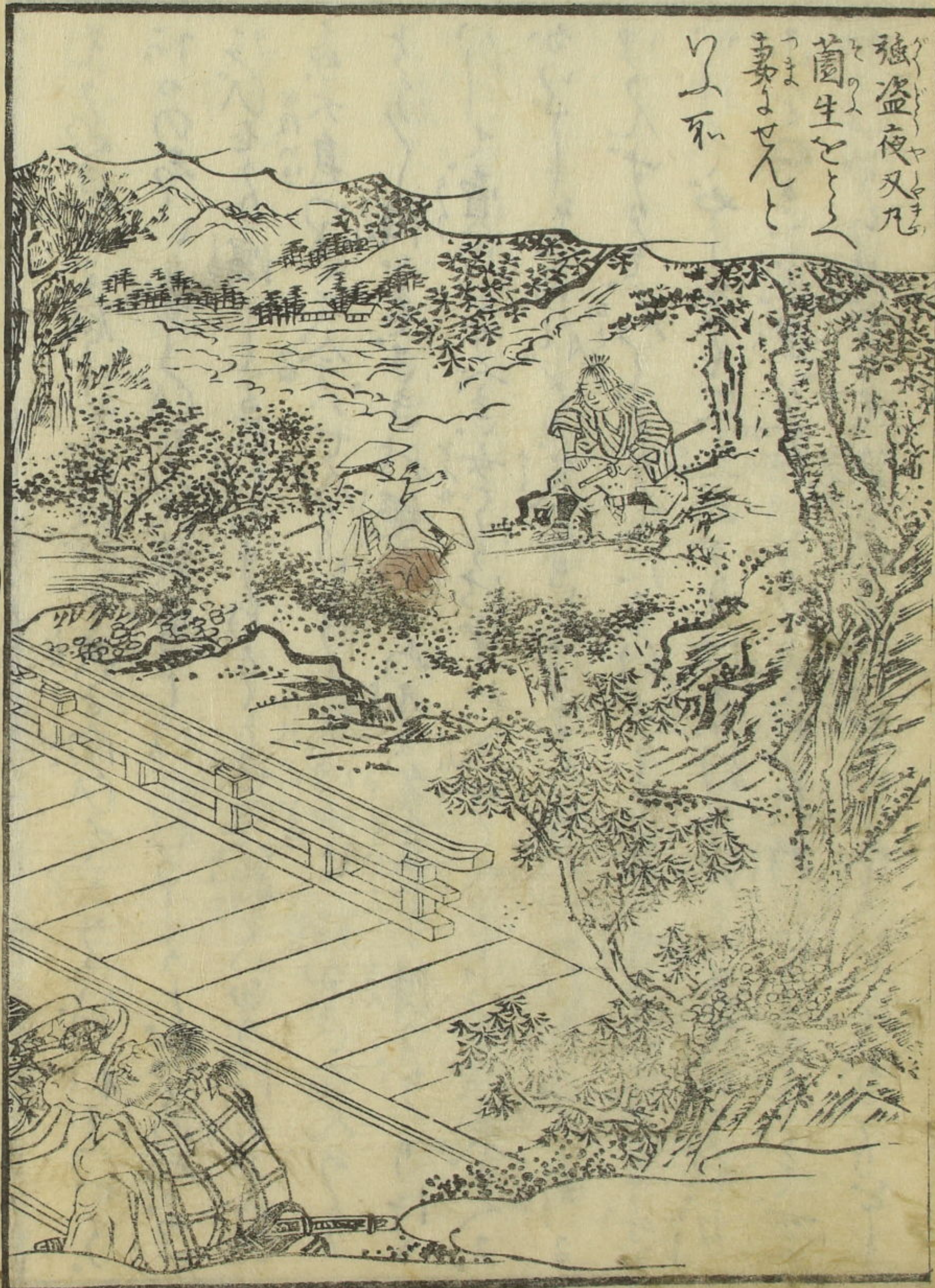
よといひくありあはれを見えはけり何か腫はり
たたゆげやるはぬにいまはたをりかれを病者としてよかく画の
腫腫るせりやうりやうり何をりのいとも何ド目ごう
ややうて愈ぬべし此女人はうりけりいべり置て我
ををうけあてけりいひやん先づにのぼせよといひて縁は
ののぼせすりりてたをりかを女をげある声あてう
ああしやまやまひはかりてさうふげやまひちるまらる人
りりてうたええまらあてあてあてあてあてあてあて
ななごふはるとうんやうりうりうりうりうりうり
ここいひくひきせきづつうりうりうりうりうりうり
ははずばいや舟のとうりてはおほくを夜又丸うち心やうく

かくれて見ゆるをたしむるをさしづむびのるぬい人どもうちめて
 ちとつひひ出し夜叉丸手をあけておのが面をちがり又手を
 うちてしし見えてさてもいひく聲うちあげて手さ
 あつたにをけりあり此やまひ人さうなるし女が若かりし
 誠なりをかくもかづかぬ我牙さうけりぬ事よといひぬ
 両り手あてさうちさたてあつたてさうあつたあつたの
 五臓六腑をさすべくくさすすすすすすすすすすすすすすす
 うすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすす
 なるぬい人どもがつかつたつたつたつたつたつたつたつたつた
 を我あやがさるうすすすすすすすすすすすすすすすすすすす
 ほじ夜叉丸丸のあつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

えうねまことねーてぬいびと共に向ひてなるはげれさうか
 何のあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 たびもろり瀉しるにたちまちあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 大息つきて今ハせんすすすすすすすすすすすすすすすすすす
 とろく彼をさすきれ姫とりあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 して賣つたすき女さう中に入ろくすすすすすすすすすすすすす
 かづーとあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 ゆえんずらさすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすす
 かけてやうかくにまあがりけるがほをたあつたあつたあつたあつた
 山をぬき氣世を蓋ひりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
 かいさうち見やりて汝といえん汝といえんとつひておつたあつた



江戸景生言巻二



穢盗夜又凡
蘭生とと
妻よせん
り不

江戸景生言巻二

げよお見返りつがづりて奥のこみを入るのありしるおぼ
 菌生そひといつてかの姫つとをこりかきたるひやの戸しをひらき
 おいれ鏡をいで出ゆきる菌生身そひのあぢきかはは
 つけてさめくしなれたると姫つとすりよりてたぐはりりりを
 ろどてさいおげきのよ法牙はははくぬ人の妻かと成なりふ
 べきはふいは免まひつまが中のうらびといおげさ
 ずやしくを菌生そひや頭をのけていらるぬくといちりまあ
 らせぬどぬんぢあよとをまつられたるをとらずは姫つとも
 とにいらくつまうけしせ給親おちはらう一はまや男おりちまり
 やしま菌生そひ涙なみだを拭くさらやもさらふ又また夫おと定りたる
 人ひとものひつれどいまぐ枕をたがいちで行いりて何なんり所も

ありゆびいしくをおをしの事やも住すみひ一ちいづくとど
 同と神かみ崎さきの里にさらさら返りす姫つと脊せをさでさすりも
 つともも橋はしの身にくもらくま事ことのぬをぬものまりに
 いしらればむらいくからいらるまあらまのまいらららづら
 おもせしといくを菌そひ生な手てをあをせてなし姫ももいくならぬ
 事ことにくからるやましひらがらめいしをいらるや盗ぬす人ひとの
 せらるるといましてはららくしおひちらづらていうやは身を
 汚けられて夫もあらがりあをあんし思おもふらけらりては
 まうけてか病い者やのかちとありていましまいしのまぬくらいく
 物語ものがたりを姫手てをあちてが一のゆをいひやありての
 やらねる心こころを女もいたまいられども姫も又身みのく人ひとを

語り出んとするをうらうら盗人等戸をかへひきききりて
 親ちやの仰おほせてちぢくを多おほ量りょう丸まるの陣ぢんかたりつか
 とひこて姫ひめをも菌きのこ生なまをもひつそを出行しゅつぎく此この人ひとの
 身のゆくすゑ後のちの巻まきよかきつぐべし。叔おじかの梅うめ丸まるのゆき
 くて近江あまゑの國くにあつ大野おほのにぶかりるに松まつげまわり
 志こころれをひそくまののさくらて伺うかがひ見るにぬひびと
 兩人ふたりちぢびのそひの法師ほふしをとて物ものをもんとす
 みをありる。梅うめ丸まる松まつげまわり旅籠を法師ほふし手てをすりく
 御ご佛ぶつも照てる覧らんあれ麓も旅籠もたなくぬまぐり一いち粒つぶ
 光ひかり法師ほふしあてひゆきせまんとぬひびとけひびの
 けひびあける物ものもちぢけひおしてんせよとひ

法師ほふしの観かん世せ音おんたびつる物ものをふかくとて人ひと
 へも見みせてたく置く物ものあては法師ほふし見みせん益無かき
 事こととりのをちぢげまらちぢたうら
 きいすのいおのれせす物ものもんとせなるきかひさぬ
 たて法師ほふしがめさき入いつまはくを命いのちのあて命いのちのあて命いのち
 此このひと品しよハ見みせすぬせとひ命いのちにうてぢとりの
 やしとバばいしき物ものあて一いち息いきのねとてんそカかのあて
 と梅うめ丸まるいとほしと思おもひくぢぢくと聲こゑうけて松まつげま
 ぢぢり出いるをぬひびと見てぢぢ小冠者をぢぢわがわけくも
 出いるうつらちぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 らせんといくも梅うめ丸まるあてちぢり。焼やぢぢおには割わり符ふ

ひとり出ておすびしが主人よおげおきて云々おのしは穉がれ
 君よつらまら今までのあてい吾君の仰せは我陣中物
 かく人なしておとらびさき法師あるをめてきん
 のまよつきておのまこころか二披りりめおで寺の法
 師を皆逃うせて一人もある事なり此法師がやうに
 物書べうれをひきつれてあつたを存して罷う
 てゆとりを兩人のぬいびとめをえんあをせてさて
 棟梁乃もの人あてを有たえうをたてあておせとて
 刀を納められ梅丸あきだいて法師が手をとて引
 だつて法師はつらまらひて足もたす梅丸はごと
 へくくたあすひてとくあゆめて法師が手を肩よかけ

ひきがづきてゆく法師ひくえんがぬいびとの書記六
 びらだごちせくとまぶを三町をり引ゆきて声あ
 だてそとひく法師を地よす急てかたりなるおのれまことハ
 ぬいびとあてゆをば故ありて都へのある者あては夫とこの危
 を見ゆるより法命すらひまおせんとかり又同敷の者に見
 せむたむりてゆかりぬすびとよもき事ハありとあれ
 どういそぎゆせまるといを法師さてハありがまき人よそ
 おろしあれも観音のあまらまべーさるてもいりたれ
 事にて割符やく物ををりせまひとつや梅丸あき
 のやすを語りて盗人よりひつりてを以て法師涙
 てみくにて鯨の口をのぐれゆる此世をりの事とを

近江県史言書二

おぼくはふげだのれい西念と申せすてびとにて法師が
 菴おぼくより一里ごりのふ具一奉りてこよひ一夜と
 まあせむやいご多人とりまざる侍よまをせんそつれごり
 てゆくらて畔とつらひ山をこえてがくに至りて見れば
 かの山のもふらひさ兒庵つりてあり。あまのハ松杉もど
 ひまもれくおいさざりたれば外よりハ菴のやねもそ
 はずがれちそき道あるをぬぐりてむひりの方へ入て鉄
 ひらきしてどもあひり。法師火をうらてとつり
 まくそべてあつらひさてひえあけりる。変り飯を扱
 盛るくむし物まざる。茶をすゑて出一つ梅丸おひひ
 ぬりてかーに預りゆとて飯をさそり。西念ハ首

懸る一品を法師のまはす急經を終て火のほとり
 事りてごてもやまの命たすく事。謝一奉るべき詞
 もゆをびざるはてもかくぬひびよめをびり横行せる
 事りて都のふのがせあふとを梅丸何りーとごもか
 りて都のふさぬとも伺ひかつ。暖城野のありす行
 くりまきるをもとひあきつめさてのぼるごとり
 けてく感でもあまり何は振廻り都ハそそのほ
 らせむを業問もありあらど。法師がすくより都ハ
 も近くつをが。この事ハくありてゆまふ乃内むくひ
 出供あて都のぼりゆをん。ふを梅丸ゆることハ思ひ
 りゆをび先問あせせん。祝音のま。物とてつら

近江県志言卷二

蘭生ぬまへ
そへられ
なまき
あつて
あつて
いゝ
ふ



志よりいふ物ありて法師水晶の玉の如く
涙を流して流しておのれにうき海にぬひかづき
て世をわたりひと思ふが如く観音の夢よ入のひく
かの一品をえてより心をわしたる今ハ随分乃修行
者と成ていふれいなりとあま物語ありて又も
ゆをちあがらうとあひつむとやせむとて枕より
出てうすうするあす候てうらまを法師もがこもに
よりてあねおれを候とあまりて出さんす
法師ももく流うとひするととれをさび梅丸
ひきとひきとあねなすがら盗人との居あまはる所
何色どかの焼ありの礼出で見せつとなくこぼりて

都あを着る都あつ武さども昼夜をこころ
けいああるそ用心嚴重かれをさすがにぬすびと
ぞもいひりとせざるのあまりに行りてるに家居ハ
えび盗人とも火をさかちるかたりいさかたあつ野
成て物とふべき人たんとびそらあづひわら
夕暮のほじ七十針の羽杖はすがりたるがまあひ
梅丸聲をうけていふ老人嘆嘆の左衛門のこころ
跡ハいつくせと人を老人つらくと見て見まら
せぬ人のがのこころをせ給いふる人をとりまのれ
た衛門のこころ今もあつこころをさかちる
公羽ハむまらなるのこころに奉公よ出たるゆり

少く常に立ち入てりやとて、ちの人のいづくありていといふ
とて、まき入よ出あひたり、おの方はいふ成あひといとて、
公羽あえられる青あておん人のいづくありて持りてい
けり、いかにこの敷うげは葬てあてとて、ふとあひい
入てん、おはかたさう、塔婆さそあり、うち見さ先
涙ぐむもて、さてもた、徳の仁徳とて、一人あておさ
とて、お妻と前ゆる人のか、あておさ、あておさ、あ
し、事あげき、あておさ、あておさ、あておさ、あ
か、せを、西念、火うち、あておさ、あておさ、あておさ、あ
ら、し、や、あておさ、あておさ、あておさ、あておさ、あ
す、む、い、く、ば、あておさ、あておさ、あておさ、あておさ、あ

多うやとて、お老人、あておさ、あておさ、あておさ、あ
お箱、脊門、あておさ、あておさ、あておさ、あておさ、あ
出て、あておさ、あておさ、あておさ、あておさ、あておさ、あ
て、あておさ、あておさ、あておさ、あておさ、あておさ、あ
ゆ、を、あておさ、あておさ、あておさ、あておさ、あておさ、あ
又、酒、あておさ、あておさ、あておさ、あておさ、あておさ、あ
瓶、子、あておさ、あておさ、あておさ、あておさ、あておさ、あ
て、あておさ、あておさ、あておさ、あておさ、あておさ、あ
は、お、あ、ね、あておさ、あておさ、あておさ、あておさ、あておさ、あ
い、い、あ、あ、あておさ、あておさ、あておさ、あておさ、あておさ、あ
い、あ、あ、あ、あておさ、あておさ、あておさ、あておさ、あておさ、あ

此の世に安世君蘭生の方あきよはゆくと
 尋ねさせると西念さいねんがすむり後あとひて又近江の
 方へと立ちかへり

近江縣物語卷之二終

